

## 第145回 三方限古典塾（'18.11.15）

### 「南洲翁手抄言志録」（その4）

13 聖人は強健にして病無き人の如く、賢人は<sup>せつせい</sup>摂生にして病を慎む人の如く、<sup>じょうじん</sup>常人は<sup>きよるい</sup>虚羸にして病多き人のごとし。（録-127）

（意識） 聖人の心は力強く健康で、病などは元々ない人のようであり、賢人の心は、自ら摂生して病にかからないように気をつけている人のようであり、常人の心は体が弱々しくて、よく病気をする人のようである。

（余説） ここでは、三者の精神上的の違いを、体の病気に例えて、分かりやすく述べているものです。つまり、聖人は本来から健全で心の病などなく、賢人は自ら修行に励んで心の病にかからないように努力し、常人は心が弱くて絶えずいろいろな事に悩み、疲れているという意味にとれます。「羸」は、疲れる、ぐったりするなどの意です。常人たる者としては、せめて賢人のレベルをめざして摂生精進して、心を健康に保ちたいものです。

（参考） 小池一夫「どうにもならないことは絶対にある。そのどうにもならないことに心を注いでも仕方がない。やるべきことは、どうにかなることである。」（人生の結論）

14 <sup>きゅうはく</sup>急迫は事を敗り、<sup>やが</sup>寧耐は事を成す。（録-130）

〔評〕 大阪城 陥る。徳川慶喜公火舟に乗りて江戸に歸り、諸公を召して罪を俟つの状を告ぐ。余時に江戸に在り、特に別廳に召し告げて曰ふ。事此に至る、言う可きなし。汝將に京に入らんとすと聞く、請ふ、吾が為に恭順の意を致せと。余江戸を發して桑名に抵り、柳原前光公軍を督して至るに遇う。余為に之を告ぐ。京師に抵るに及んで松平春嶽公を見て又之を告ぐ。慶喜公江戸城に在り、衆皆之に逼り、死を以て城を守らんことを謂う。公聴かず、水戸に赴く、近臣二三十名従う。衆報じて以て主と為すべきものなく、或は散じて四方に之き、或は上野に據る。若し公をして耐忍の力無く、共に怒って事を挙げしめば、則ち府下悉く焦土と爲らん。假令都を遷すも、其の盛大を極むること今日の如きは實に難しからん。然らば則ち常人の忍ぶ能はざる所を忍ぶ、其の功亦多し。舊藩士日高誠實時に句あり云ふ。「功烈尤も多かりしは、前内府。至尊直に鶴城の中に在り」と。

（意識） 何事も急いでやると失敗する。落ち着いて忍耐強く、好機の至るのを待つてやれば、目的を達することができる。

（余説） 諺にいう「急いては事を仕損じる」と同義です。ドイツの詩人・歴史学者・思想家のシラー（1805年没）にも「偉大なる精神は静かに堪え忍ぶ」の教えがあります。

一方では、ぐずぐず拘泥して「機を逸する」ことも多々あることも現実です。そこから辺の「適時的確」で、バランスのよい判断こそが必要とされることです。

柳原前光公（明治27年没）は公家、戊申の役で東海道先鋒軍総督として活躍しました。

將軍家茂の侍講を務めた秋月種樹の「評」だけに、將軍慶喜の忍耐強さを高く評価していますが、ドラマでの慶喜と勝海舟の会話から受けた印象とは些か異なっています。

（参考） 言志録 182「<sup>もうどう</sup>処し難きの事に逢わば、<sup>すべか</sup>妄動することを得ざれ。<sup>うかが</sup>須らく幾の至るを候いて之に<sup>みだ</sup>応ずべし。」（処理の難しい事件に出会ったなら、妄りに動いてはならない）

15 聖人は死に安んじ、賢人は死を分とし、常人は死を畏る。

(録-132)

(意識) 聖人は生死を超越しているから、死に対しての心が安らかである。賢人は生者必滅の理を知っており、死は生きている者のつとめであると理解していてあわてない。凡人は、ただ死を畏れてとり乱す。

(余説) 串木野市の冠嶽は、紀元前3世紀に秦の始皇帝から不老不死薬を探しに日本に送られた徐福が、冠を置いたという伝説があります。それ程昔から人は「老と死」を恐れ、現在も熱烈な抗加齢(アンチエイジング)願望が盛んです。その一方で、医学が大きく進歩した現代では、肉体が生命力の限界を超えているのに、死なしてもらえない苦しみなどへの警告も多々あり、本文の趣旨とは次元の異なる問題点が浮上しています。

聖人の如くに振る舞うのは、参考にあげたように現実として難しい私たちですが、死と生の問題に関心を持って、自己流の死生観を探し出すことが大切だと言われます。

「死への意識」が「生」を支え充実させ、「死」を論じることが、実は「生」を論じることになると、多くの人が説いています。

そのような中、残された日々を「掌中の珠」のごとく大切に暮らしつつ、多様な事態をも想定して心の準備もしておき、穏やかな最後を迎えたいものと切に念じます。

(参考) 大田南畝(蜀山人・江戸末期・狂歌の大家、74歳で病没) 辞世の句

「今までは他人のことと思うたに俺が死ぬのか こいつはたまらん」

仙崖和尚(江戸末期・臨済宗の禅僧画家、88歳で病没) 弟子から辞世の句を求められ

「ほんまにほんまに死にとうない」

吉田兼好(67歳で病没) 徒然草7段「飽かず、惜しと思はば、千年を過すとも、一夜の夢のこちこそせめ。住み果てぬ世に、みにくき姿を待ちえて何かはせん。命長ければ辱多し。長くとも、四十に足らぬほどにて死なんこそ、めやすかるべけれ。」

16 賢者は死に臨み、理の当に然るべきを見て以て分と為し、死を畏ることを恥じて死に安んずることを希う。故に神氣乱れず、亦遺訓有り、以て聴を聳かすに足る。而して其の聖人に及ばざるも、亦此に在り。聖人は平生の言動、一として訓に非ざる無くして死に臨み、未だ必ずしも遺訓を為さず。死生を視ること、真に昼夜の如く、念を著くる所無し。(録-133)

(意識) 賢者は死に臨んで、当然来るべきものと考え、死は生者のつとめであると覚悟して、死を畏れることを恥じ、むしろ安らかに死することを望む。故に心が乱れない。また、残された教訓があつて、傾聴するに値するものがある。しかし、賢者が聖人に及ばないのも、この教訓にある。聖人は、平生の言動がすべて教訓となるものであつて、死(歿に同じ)する時に改まって教訓を述べることはしない。死生をみるのが、まるで昼夜のようであつて、特別なものと考えないのが聖人の死生観である。

(余説) 西郷どんが城山で「晋どん、ここらへんでよかろかい」と、平然として首を打たれたのも、平生の言動が遺訓となつており、そこが西郷が聖人たる所以でしょう。

賢者のように「死」に望んで達観するのは難しいですが、「この達観に接近しようとしたのが、日本的な死生観の特徴であつた」と、佐伯啓思は「死と生」に書いています。